

東洋の思想と宗教 第三十五號 平成三十年（二〇一八）三月 抜刷

福井文雅先生追悼

弔

辭

森

由利亞

福井文雅先生追悼

弔 辭

森 由利亞

福井文雅先生の御靈前で、先生から長らくご指導を頂戴した學生の一人として僭越ながら弔辭を述べさせていただきます。

福井先生に始めてお會いしたのは、私が早稻田大學第一文學部人文專修に在籍していた際、先生が擔當された二つの演習に出席した時のことです。『史記』封禪書の讀解と、六朝志怪小説の佛教・道教に關連する説話を取り上げる授業でした。先生が宗教の儀禮的な側面に特に力點を置きながら解説されるのが新鮮で、強く興味を引かれました。今から振り返れば、儒佛道の思想を儀禮という社會實踐の場において考えるという、先生の御學問の眞骨頂であり、先生がヨーロッパ留學經驗の中で養われた視座を、學部生向けの授業の中でも披瀝して下さっていたように思われます。ある時、授業の後で私が道教に興味がある旨を申し上げると、大學院で『雲笈七籤』を輪讀する先生の授業を聴講することを許してくださいました。その後、學部での卒業論文で指導教授としてご指導を仰いで以來、東洋哲學の大學院でも一貫して先生のもとで勉強することができました。

福井先生のご指導を仰ぐなかでひとときわ印象深い出來事は、先生がことあるごとに海外の研究者との交流の場に私たち學生を連れ出して下さったことです。特に、一九九一年にバリのコレージュ・ド・フランスで開かれた日佛學術シンポジウムに誘

って頂いた時には、先生のフランス留學時代の學友であるクリストファー・シッペール (Kristofer Schipper) 教授の學生さんたちとの交流も経験し、大いに刺激を受けました。

大學院の授業でも、一方で『雲笈七籤』や『佛祖統紀』など道教・佛教について幅広い視野を得るための輪讀を行いながら、もう一方では、呂思勉、陳寅恪、ヴィクター・メイヤー (Victor H. Mair)、ジャン・ナティエ (Jan Nattier) といった海外の新舊の學者の著作を読むのも、非常に勉強になりました。先生は、常に外に刺激を求めることを重視しておられ、様々な機會を通じて學生に教えてくださったように思います。特に、ヨーロッパの學者や、學問動向について質問すると大變嬉しそうに答えて下さいました。それでいて、先生は弟子にご自分のやり方や視點を強要するようなことはなく、自由に勉強させて下さいました。先生もよく「来る者は拒まず」とおっしゃっておられました。様々な興味をもつ學生に指導の門戸を開いて下さいました。そこには、先生ご自身が一九六一年 (昭和三六年) から一九六四年 (昭和三九年) まで三年間、フランス政府給費留學生として海外に出られてパリで研鑽を積まれ、多くの言語や専門を通じてものを考えて來られたことに由來する自信のようなものが感じられました。

先生は、よく學會の席などで齒に衣着せずはつきり言われることが多いので、人によっては「厳しい先生の指導で、さぞかし大變でしょう」と言ってお下されることがありますが、實際は、大變明るくおらかなお人柄の先生でしたので、傍目に心配されるほど大變だと感じたことはありませんでした。確かに、厳しく叱られることは何度かありましたが、一度お叱りになるとその後はさっぱりと忘れたかのように、楽しそうに接して下さいました。思えば、自分のような身勝手な飲み込みの悪い學生に本當に優しく接して下さいましたと、感謝の気持ちでいっぱいです。

その先生がすでに逝去されたということが、いまでも信じられません。先生からいただいた御恩は、日々精進して今後の世

代に歸していかなくはなりません、頂戴したものの大きさを思うとそれは容易なことではありません。心からの感謝とともにご冥福をお祈り申し上げます。

平成二十九年十一月二十六日